

おぼえ帳

(一)

○紙十枚ばかり綴ぢたるをおぼえ帳とて、幼きころは誰もしつる事なり。初めは終犬鎧を書きつけて假名ふるに過ぎざりしが、母上が賜はりし月の小遣ひの出入、戯れも石筆いくらと迄はよかりしも何々様の縁日に葡萄餅いくらより亂れて、果は武者の首二つ三つ、これは清正ぞと烏帽子の蛇の目丁寧になぞりしを、或時すこし引ちぎりにて紙縷の用に立てしが、遂に鼻拭紙にをはる非なりけり。似たるものなればわれもここにおぼえ帳と名けて、見聞くがまゝの浮世といふも烏滸がまし、都にこそ育ちたれ隨筆といふ年にはあらず、興なきがやがてお話なるべしと次第も定めず、ほんのそこの落葉時雨、窓の下に筆の箒の只かきつくものなり。

○ことし二月、小石川の蓮華寺といふに火を放けたる者あり、渦巻く煙の裏手一面掩ひかゝれるをさりとて白川夜船、のりの道とて夜は寐るものなり起出でざりければ、山門推明けて巡查

は走り入り庫裏の戸破るゝほど叩きたるに、夢の彼岸の驚かされし住持は何ゆゑの火と辨へず、唯われ過つてりとのみ跳り出づるより早く姿を隠しぬ。寺中の僧ども、住持の見えざるを氣遣ひて黒きものに頭を包み、しるしの着きたる提灯を振りかざし、ひごろ互ひに寺の名を呼び合へばにや、高き石段の上なる高き御堂の、さしも焼けほこりて火の粉は佛の庭に降りかゝる蓮華寺蓮華寺と、つゞけさまに呼立てゝ今や棟の落ちんとする堂の周囲を幾たびとなく廻り居たり。其姿、其聲、稀有なる事なりし。

○寺の名は忘れられと胸込なり、火出づると聞くと住持は遑早く尊像さゝげ持ちて境内の隅なる公孫樹の下に壇しつらへて遷したてまつり、おのれは袈裟嚴かに掛けて側々に侍し、什其とては何一つ取出さず、經靜かに口の裡に誦し居たり。冷骨癩癩、一夜に佛二つ見たるは此時と、或人語れり。

○衣きらくと眩きはかりなる老僧の、何事か出で來つて、電話かけ給ふを淺草の局にて見し

ことあり、似合はしからず覺えぬ。

○花の雲、上野も已に遅しといふほどの事なり。動物園前の木の下に毛氈鋪きて、僅四五人やがて行く春の名残を惜まんとおもむるに茶を煮ながら、あかね色香を世に墨染の袖に留めて、日は暮近きに去らんとせざりしが、掌に茶碗撫でつゝ老いたるが空ゆたかに看上ぐる顔に、もとより淡紅の今はた褪めたる雪一つかみ、やゝ若きが覗き込みて散りますとのみあはと復言無かりし。袂を着する春風の歌おもひ出されて、さのみ事ならねどわれは忘れず。

○入相の鐘に花ぞ散りけるといふ歌ほど、やさしきころの何人にも解せらるゝはなかるべし。されどもそは此歌の取て秀れたる故にはあらず、春の夕暮おもひに膝へぬはもとよりなるを、偶々この歌主の早く世に生れたる仕合せなり。文にも詩にも歌にもさては併句にも、先取権の利益といふはあるものなり。

○くものふるまひかねてしるしもの歌に就て、或人戯れて曰く、鼠啼は衣通船の頃よりありしと。をかし。

○吾兄子の來べき宵なり玉子酒とは、金玉の十千萬堂氏が風流妄語と題したる句の一つなり。艶なるものとて、評判高かりしも、われはいさゝ

か服し難きものあり、もと玉子酒は調へて待つ品ならず、必ず宵にと約したる男の更けて漸う來りしに、かゝる時よと女の急立ちて鍋の下あぶぐを、男はことさら嬉しともいはず其處に重ね敷きたる物の上にはや庭そべりて長羅宇の煙管取上ぐるといふことならでは、おもひぞ煮ゆる玉子酒の折角熱きもきゝめなし、いづれは待宵にきみしろみの取合せよろしからねば、鮫の煮廻りの誤ならずやと、つい馴れし口もたゝかるゝなり、いかゞや。

○精生えたるは指のお方、眼鏡かけたるは眼鏡のお方、路行く人を恰も視機關の如く見るまゝのこと言掛くるは、彼處にても猶表立たぬ家の習ひなり。世は泰平の酒の香高き男、眼も危く足も危く唯よろゝと通過ぐるを、内より女の格子にすがりて、千鳥足のお方と呼ばば、生酔は忽ち立どまりて、おれが事か。

○吟には角なる字すらゝと讀みて、家一番の學者と呼ばるゝ女あり、傾城瀬川傳とかいへる赤本の茶棚の上にありしを客の取用でて、宜なる哉言やと此處に見ゆるは何ぞと問へば、女は良久しながめ居たる後、むべといふ字はよろしといふ字なり。故にむべなるとはよろしなるといふ事なるべし、されども、されどもと首

傾けて、この「哉言や」がわからぬ。

○知らぬお方に三圓貰ひこれが御縁五圓になればいとは、一ころ落語家の繰返し叫へる所なり。いさゝかの無心を選たたる客の許へ、浮草や流れの身は愛想盡かしも手管の一つ、掬やの文おくりたるが、大方は宛字の妙を窮めたる女のこととて、なき縁と書くべきをなき圓と書きたり。適切といふことと思はぬ邊にあるものかな、客もあまりの可笑しさに見返り柳、吹かけられしまゝを果したりとぞ。

○さる好事家の連立ちてあやしき處に登り、探突を忘れ給ふなと言交はしたるを女聞きはつりて、さばかりの洋語われ豈解せざらんや、それは難有うといふ事なるべし、何のお禮ぞと言ひけり。

○今は早十年の昔なり、二三の銀行紳士打寄りて英書を修めたることあり、志は殊勝なれど孰れも若からぬ人々なれば、物忘れしばゝなるに師は困みしが、漸くパーレーの萬國史に通り着きしより、片言にもあれ平生勉めてこの方の語を用ひたまへと勧め置けり、或時其中年長者の家に相談會ありしに、おもひしより早く果てしかば、幸なりこれより教師迎ひに遣らんと主人の言ふを、皆々それ然るべし

と同じたるに、なにがしの紳士のみは之れを遮りとどめて、今日は止めたまへ止めたまへと言張りたれども、さる不熱心のことにてはと皆々の聴かざるにさらば餘儀なし、わが供をと紳士はおのれの車夫を走らせたり。およそ物の二時間を経て、参りしといふに此方へとて入來るを見れば、さても訝しや天地は昨日の天地なるに人は今日島田嵩、オホとばかりの笑ひ聲に皆々膽を奪はれぬ。この師、萬國史には精しからざれどもお座附に精しく、譯讀は清元出の些鼻にかゝれど、彼のなにがし紳士の其音をいつくしみて柳橋に飼ひ置く蟲なりとぞ。名を聞けば小千代、即ち千イチやん。

○老大通は知れることなるべし。松呂といふ男至極の半可なり。さる人のもとへ何々の代金御拂可被下候と書送るべきを、御佛と書きたり。さる人可笑しがりて其由松呂に語れば、松呂あまたび點頭きて、されば忙はしきまま書誤りたり、げに拂といふ字は行人届なりし。

○淺草の俚俗堀田原に、近きほとりの子供六七人あづかりて、明治の今も寺子屋といふを開き居る人あり、貧しき家の子供等の月謝としては白銅壹箇超ゆることなければ、家賃なり飯料なり

の到底引足るべくもあらず、傍らに寶劔道共の繕ひを受負ひて、わづかに一人口をすこし居れり。常に子供等に訓へて曰く、文事ある者は必ず武備あり。

○母なる人の買食好きにて、これもいらぬ、あれもいらぬと屑屋が手に渡すをつねに見る子の歳は六つか七つか、やかましき伯父の久々たづね来て、其家の雪隠の勝手わきを、かゝるは無きも同然なりいらぬものなりと呟きしに、聞くより早く子は母に嘯きていふ、屑屋に賣るといふね。

○これも同じ年ごろの男の兄なりし、あわたくしく外より駈込來りて、三丁目の家にてはいよいよ昨夜あかん坊の産れしといふに、さては男か女かと母の問返せば、それは知らねど何でも雙生兒なりといふ。よもさる事はと母の合點ゆかぬらしきに、でも何處かのをばさんが来て、お二人ともお達者でと言つたもの。

(二)

○花のもとにてと例の法師が蟲のよき註文も、つまりは其きさらぎのもちの皮、人の榮耀に過ぎず。霜更けて聞く櫓の聲、千鳥啼くらん冬の夜の身投の數の數きは、新聞の記事に徴する

も明かなり。死は宜しく自力なるべし、他力なる可からずとの論出でしに、さらばとて死の工夫をさまふと案じはじめた人の傍より、鐵道往生こそ最も手短なれと混返す如く言ひし者ありしに、其人忽ち躍りあがりて、イヤあれは危険い。

○おもひ通りて心中と約したる男女の南無とばかりにひとしくモルヒネをのみしに、其量の少かりければ互に手を取合ひたるまゝ、いづれこの世は夢かうつつか、ぐつすりと呼眠りに眠りたるのみ。やがて眼覺めたる女の、はやあの世といふへ來しとおぼえて、そと男を掻起し、ちよいとお聞きよ、こゝへも豆腐屋が来るよ。此は予が幼き折芳町にありたる話なり。

○さとの雨、ゆかしきよりは淋しきまゝの事なるべし、女四五人一堂につとて、今も昔もおなじ勤めの愛しやつらしや、末しら梅の因果物語といふを、さる人の聞かせけり。香に高きこれが由來は大方の人の袖、うつし傳へて知ることなれども、序なれば左に抄録すべし。

菅谷次郎八といふは御番組勤役、食祿四百石を給はれる者なり。新吉原角町、家田屋の抱遊女白梅といふに馴染を重ねて、御番の暇、雨風いはず通ひけるが、延

享三年夏のはじめ、京都二條御城在番に當りて、いよく出立と定まりしより、其由白梅に語りけるに、殊の外名残を惜みて一夜夜泣明かしたり。來ん年の春の末には戻るべし、わづかに一年の辛勞ぞとて、詮方なければ次郎八も涙ながらに別れしが、其ころ大阪に竹田細工といふものありて、巧に人形を作るよし傳へ聞きしかば、次郎八は白梅が面體こまにかきて、それを人程の大きさに作らせ、白梅と呼びて寵愛しけり。ぜんまい仕掛けにて手足動き、いさゝかに人に異るなし、この製造近來御法度なり。ある夜人形と一つ床に入りて、いかに白梅汝はわれを可愛しと思ふかと、戯れに次郎八の言ひしに、眞實可愛しうござんすと、人形の口動かして答へしは、白梅が聲と毫差はず、次郎八むつくと起上りて、奇怪至極、われ白梅の色香に迷ひ、片時も忘るるひまなきを狐狸の魅みて、誰かすと覺えたり、これゆる大切の御奉公席略に致し、勿體なき事なり、ゆるしたまへと天地を拜し、枕元なる脇差取るより早く、人形眞二つに斬つて棄てしは、流石武士の本心なり。一年の勤務了りて江戸に歸り、兎も角

もと家田屋に行けば、白梅は相果てたりといふ、いかにしてと問ふに、何者とも知れざる初會の客ありて、座敷も面白からず引けしが、其客白梅の寢入りたるを窺ひ、胸元を刺通し、かへす刀におのが咽喉を買きて雙方とも落命したり。おもふに其客、身に不首尾の事ありて、わざ／＼早に入込み、利なき遊女を手に懸け、相對死ともいふやうに、こしらへしものと見えたりと、委細の話を、それは何日と聞けば、七月五日夜八つ時、即ち次郎八が人形を切りしと、同年同月同日同刻なり。あまりの不思議に次郎八は唯驚きあきれて、頓に好色の心を改め、白梅の山谷邊へ葬られけるを、本所の本行寺(日蓮宗)といふへ移し、深教院妙香白梅信女とて、塚をも築き、跡懇ろに弔ひけるとぞ。

はじめより耳傾けてき居たる女の、よその哀れに誘はれて泣くほどなるが一人見えしが、翌朝辨當といふの残れるをつき散らす如く頬張りながら、前に一枚の男の寫眞を置きて、もが／＼と口の裡にて咬くを何ぞと人の問へば、今なら寫眞が物を言ふかと思つて。○言交はしたる男のいつの程よりか秋風立ち

て、露しげき野に取残されし葯の葉のうらみ堪へ難く、涙はこゝに片時雨の染め出すもみぢの巻紙へ、其かず／＼を山とつらねたる末、折を見て死ぬべく候と書きしは、さとの女のおのづからなる心なり。男これに答へて、死ぬに折は入るまじく候。

○このたびは／＼とあやしき發明に製造場の門太しく建て、屋根葺く頃には見事倒るゝが例なれば、随つて家産は全く傾け盡し、石鹼にもあれ香水にもあれよろづ製造に明るきとにも、よろづ損失にも明るき士族出の老人ありしを、人皆嘲りて發明家といひけり。枯木の身にも今一花の心失せず、彼の毒錢蒸汽の收入夥しとききて、二週日ほど大川縁を往きつ戻りつ、いつもながらの思を凝らしたるを漁夫ならぬ巡査の内々は今の世の屈原とも見たるならん興、衆醒ひ我醒めたる心算のやがて熟したりとおぼしく、懇意なる質屋の隠居が許に行きて、金主たらんことを頼み、二挺櫓三挺櫓の數を増して、八挺となさば競争は易き事なり、晴には鷗も水脚棹、さすともなく來て舢舨に遊ぶべく、雨には苦を推退けて、振返る待乳の森の初杜鵑、いづれも歌によまるべし、汽船と和船と、風情のほどを思ひやりたまへとて幾々數

千言いつ已むべしとも見えざるを隠居が遮りて、大約一艘の乘客何程一人の貨錢何程と問へば、いよく／＼したり顔なる發明家は、吸ひさしの烟管ぼんと撲きて、それはまだ考へませぬ。

○芝居觀てもどりたる人の、團十菊五のひいき争ひ果てしなき折柄、このほどより寄食の田舎漢口を挟みて、定九郎は出ましたかと言ふに、おの／＼顔を見合はするばかり、忠臣蔵の狂言ならねばと言へば、田舎漢は首を掉りて、イヤ爾でない、あんな悪い奴なれば、いつ何處へ顔を出さうも知れぬ。

○うづらを取置けて、都なれぬ書生を芝居茶屋に遣せしに、途にて書生は驚とあやまりしも、機轉利きたる茶屋男の、こま／＼と噛みふくめて歸しけり。かへり來りて書生は同様に告げていふ、先刻驚と仰せられしは郭の誤なり、郭は無き由なり、併し、併し、應ならば御座ります。

○其家の車夫亦うづらを知らず、奥様の御出ましにあたり、下女にむかひて、雀よりは些と大きいのが、よく啼く鳥があるだらう、何とか言つたつけのと問ふに下女は何の氣もつかず、驚かえといへば、それよく、西の鶯だ。○名のみはやさしき富といふ房州者を、わが

家に置きたることあり、蕎麥のかけを與へたるに、其折は戸欄に藏ひおき、晩飯にのぞみて取出し、蕎麥一口飯一口菜のやうにして食へり。後温飴のもりを與へたるに、先づ温飴を食ひて、あとにて汁を吸ひ居たり。

○月見芋とはいかかなるものぞ、あたり芋なり、客解せず。いかにして製したるぞ、玉をおとしたるなり、客猶解せず。いかにして食ふべきぞ、紫をかくるなり、客猶々解せず。こは予が露車に出したるものなれども、まことは深川の露蕎麥にて見たるなり。客の都人ならぬは勿論なれども、婢も亦帳場の教通りを守りたる新參の者なりし。

○夏の事なり、五日茶しといふを或會席茶屋にて出したるに、席に在りたる老大通の、わが着たるは帷子ぞといはぬばかりの顔色、昨晚から大分穢りましたなといへば、婢はさりともしらず、それはお樂み。

○老いて醜き妓の其席に侍りたるが、あなたに何處でかお目に懸りましたやうなと紋切形のこと言へば、多分は上野の動物園でと老大通の苦々しげなるに、これも妓は遂に曉らず、この春でしたかねえ。

○なにがしの子爵殿、御ひいきの茶屋へ參られ

て、こゝのきんとんは何故いつも冷たいぞ。以上二つは、あま蛙にとり用ひたり。

○まぐろの土手の夕嵐、身を切賣の皿の中とあま蛙に書けるを見て、或批評家は太く難じたり。何ゆゑとも分きかねたればたづねたるに、批評家の曰く、天下豈まぐろを以て築きたる土手あらんや。

○支那料理知らぬ人の借樂園に行きて、問ふは恥ならずと婢にむかひ、茶單とは何ぞ、豚か鶏か。

○たえて世に疑問といふもの有たざるによりて、紳名を明瞭先生と呼ぶる人あり、婿がねのがねとは如何なる義ぞと一學生の質しけるに、先生言下にこたへて曰く、雁がねのがね、釣がねのがねと、げに明瞭なりけり。○熱心なる菜食論者の、人も牛も異ることなき由説明かしけるに、聴き居たる一人、頭をもたげて曰ふ、でも僕等には角がない。

○若き人足の足場組むを下より頭の看上げて、うまいく、素人蹴足だ。

○この花の色はと元我家の出入なる植木屋の爺の、垣に唯一輪の今咲かんとする薔薇を指すに、白ならずやといへば君も白しと看たまふか、われも白しと看るなり、されども君の白しといふ

とわれの白しといふと、果して同じなるべきか疑はしとおもひよらぬ言葉に、それはと少々因みある事共聞かすれば、見たまへ歳は學問なりと、来る毎にこの爺誇りてやまず。

○これは新聞にありしと覺ゆ、火事は隣番地といふに一方ならず立懸ぐ折柄、障子紙門を持出す者あるを細君の認めて、そんなものは何うでもいふよ、大屋のものだよ、これをさと鏡臺差つけて頼冠りの顔暇けば、其人は大屋。

○馬喰町の梅治といふは、古くきこゆる旅宿なり。東京見物に來りたる男の、一夜月花のよし原に遊びたしといふに、添狀書きて知れる茶屋へ送り届けたり。乗せ行きたる車夫、くれぐれも言附けられしと見えて、茶屋の内儀にむかひ、ちよつと一筆、お客を預つたと書いておくんさい。

○廓のきぬぐわれもの心煩なれども、さすが友にも謀りかねて、ひとりひそかに大門を互相の鐘の聲、暮れて花咲く仲の町の西の宮といふへ到り、何分よろしくと羅馬字入の名刺を出したる人あり、なにがしの文學士なりといへど、そは僞りなるべし。

○去年の夏、かしこに祭禮あり、神武天皇御東征の人形を造りたるさへ、眉ひそむる人ありし

に、猶聞けばわが軍凱旋のつくり物といふもありて、何々少將が儼然と立ちたる傍らの杭に、筆太にのしたる文字は、大日本遊廊。

○女の部屋に、高貴の御肖像を掲げたるをかし、東潮が三たび死を決しての軸を掛けたるをかしけれど、處柄とて最も可笑しきは、大なる額に一六居士の書にて、研精而不倦とありし事なりと、さにと委しき人のいへり。
○掃花遊と書ける額の、解し難しと一人がいへば、又一人のいふ、勘定を綺麗にしるといふ事だ。

(三)

○博士といふも人の端とや、相會したる時彼方の曰ふ、亡き何某の公はまことに稀なる碩學なりし、されども惜むべきは愛憎の念つよく、往々あらぬ人を賞揚したりと、其語の未了らざるに此方の曰ふ、だが激く君を賞めて居た。雙方新體詩を以て長く世をなやまし、猶なやま

さんとする博士なり。

○從三位様、御成已に七十を踰えたまひて御足元のあぶなければ、杖をと令扶共の勸めまゐらすれどき、給はず、敷詰めたる絨氈に躓きて殿間の口に轉びたまへるを好き機會と、館の男女

打揃ひて切に諫めたてまつりしに、從三位様膝頭をこすりて皆を睨まへ、むかしはわれを駕籠に取りこめて、山青く水白き長の街道を些の便宜も與へず、たまに開明の世の月も花も自由なるに遇へば、忽ちわが好かぬ杖をもてといふ、さりととはと御聲一段光く、主を主とも思はぬ奴よな。

○君も人なりわれも人なり、同じなるべしとの意を、さる地方にての戯れ言に、おぬしとて××でもあるまい、おらとても大名ではない。

○そつと行く人といへる題を得て、蜻蛉の手づらまへと答へたるもよし、勘定の外といへる題を得て、小楊子の掴み取りと答へたるもよし。

○建附のいふといへば、すかぬといふ程なるは誰も知ることなれども、一ころ江戸にて、才能足らぬ男を富津といひしは、ばか貝の名所なるによりてなりとぞ。

○赤犬黒猫といふことあり、犬は赤きが、猫は黒きが、味の美なればなりと。

○箔を延ばすに用ふ、故に金銀を延ばすなりといひ、粉を寄するに用ふ、故に金銀を寄するなりといふ。晦日蕎麥とていづれは慾淺き人々の、小遣ひ錢に間へぬとはかりの延喜に過ぎざれども、西と東と言ふ所異れり。

○上州は高崎の者とか、鍛冶屋の小僧の十三ばかりなるが手も足も眞黒になりて追使はるゝを、何處が顔ぞと人のからかひしに、小僧振返りて、息の出る方が前だ。

○叫すこし隔て、辻賣の聲、何とは知らずあはれの誘はるゝものなり、それなる小僧の江戸に出でて、一たび其聲を聞きてより歸りて後も耳につきて忘れず、遂に主家を出奔し、人の命は五十年夢よりも淡路島、大小路を通ふ千鳥の波のまに、浮世の海に何處ぐらん戀の辻賣となりて、春はおぼろ秋はさやかか月に一しは聲張上げ、うれしきたよりの提灯かたげて、生涯を彫度だよのおたのしみに送りけるとかや。

○朝は淺草、晝は芝のは少しく劣れり、夕暮かけて夜は上野の鐘、最も妙なり。今はべんき塗の間よりひびき出づるに、莊嚴の七分は失ひぬと或人の言ひしかど、かしこの笹原茅原芭原なりしは、さのみ古きことにもあらず、強ひて無給にて住込みたる男の、わづかに山下邊の志ある人々より、飯米を得れば食ひ得ざれば食はず唯鐘撞きて、これ白髮の世を終る末迄やめざりしがあり、聞くにこの男妻を先立たせたる悲みに得堪へず、せめては其冥福を祈らん

がためなりしと。

○所用ありてこの程動坂のほとりに行きしに、壁落ち杜傾き櫓朽ち屋根破れて、人住むとも見えぬ家の裡に聲するが訝しければ、近聞なる友にたゞしけるに、さても其あばらやに翼を張るは蝙蝠ならず、鳶とは名のみ勇ましき四十男、のそりと出でてはのそりと歸り、多くはあらぬ腹掛の底はたきて、皆酒にするものよし、面白きはこの男、人の前にては何事をも言得ず、二才等が頃の先の指揮をも受けて、おい／＼とばかり倒けど、家に戻りて一盃二盃三盃目より大胡坐、膳に向ひて其日の心に満たぬ事共諍々とならべ、漸く聲高になりて、さあおれが相手だ、矢でも彈丸でも持つて来いと、たけり立つ勢ひ凄じく、初めはまことの喧嘩かと疑はれしに、敵手はあらでいつも一人なるに今は警官も立寄らず、やがて勞るれば其儘疲入りて、あすはまた例ののそりと、こゝに久しく變らずとなり。

○をかしさの今に折々憶ひ出さるゝは、横濱の人とおぼゆ、旅順口陥りぬとき、ほんのしるし迄と赤飯を警察署に持行きたる事なり。

○わが知れる人の巡査を拜命したるとき、厭なは大道に立ちて説諭といふことをするのなり

と言續けしが、今日はこれより非番の歸り途、立小便する人あるを見て、わざと避けて近き拔裏に入りしに、折しも夏の眞晝なり、こゝには裸體の男、これはと元へ取つて返せば、彼處の小便尙歌ます。

○われ今宵、日本一の事をなすべしとて日本橋の上より川中目懸けて、尿したる人あり。

○臆病を以て聞えたる新進作家の、夜深けてひとり路行かんはいと／＼危し、闇にもきらめく刃の稲妻、聲をも懸けず後袈裟に斬附けらるゝこともやと言ふに、君はさる恨を受くべき身かといへば、いえ／＼用心せぬと、世間には人違ひといふ事があります。

○一里が程の渡船に乗合の誰彼疾く汽車の通ぜよかし、櫓の音の唯きい／＼とのみにては、急の間に合ひ難しと呟けば、船頭憎さげにこれを尻目にかけていふ、お前方は何うしてそんな事がわかる、何日汽車と船と乗りくらべなすつた。

○落語家がいふやうなる事を目前に見るは、區役所の戸籍課なりとぞ。三十許なる女の來て、もう一日もあんな人とは添つて居られませぬかな、どうぞ籍をお取りなすつてといふに、亭主の名はと問へば、名なんか知るのですか、たゞ

内のお前さんでさあね。

○六十あまりの老婆、送籍を願ひますといふ、籍は何處に在るぞといへば、こちらのお役所へちゃんと預けて置きました。

○私の親父は何處に埋けてありますと、廿五六の若者の躍込みし仔細をたづねれば、八年前の家を出でて今日都へ還りしに、家もあらず父もあらず噂には死したりとききて、直ちに區役所へ歸來しなり、行倒人の名簿の中に、右衛門と左衛門の唯一字違ひなかりければ、これなすべしと假埋葬地を教へ遣りけるに、若者は眼を塵脚きて、お役所といふは難有えものだ、もう御迷惑は掛けません、それでお手数料はいか程でございます、いづれ改めてお禮には出ます

が。
○あやしけれども絲織の小袖に、縮緬の羽織着て、年も三十五六と見ゆる丸鬚の、これより宇都宮へ行かんと思ふなり、着かば早速爲替にて返上すべし、汽車賃を貸したまはれといふに、此處はさる事を扱ふところならずと、懇ろに區吏の諭せども立去らず、あぐね果て一錢もなしといへば、女は悄然と戸口迄到りしが、忽ちキツと看返りて、何だお役所だなんて、大きな屋臺骨をして居ながら、二兩二分や三兩のお

金が無いのだとさ、鄙吝にも程があるね。

○期滿ちて廓を出でたる女の、これも送籍の届けに来て、お粗末ながらと掛員の前へ、濱名納豆の曲物を出しけり。

○未入籍を了らざる妻の出産したるは、いかなる手續に據るべきやとの間に、庶子として届けよと口頭にて答へたるに、認め来りたるを見れば、初子。

○何といふ娘の籍を、わが方へ入るゝとて参るとも必ず御却けと若き男の言入れて歸りし跡へ、果して其届けあり、譯あるべしと雙方を呼出し、先づ娘より調べたるに、娘が父は塾師にて、彼男今は油賣なれども、元は其處へ出入の襦袢服なり、おもひ思はれて逢瀬の度の重りしを親は咎めず、嬉しや添はせてとらすべしとあるに彼男用意の折柄、不圖聞けば娘は已に二度迄縁つきたる事ありしも、いつも戻さるゝは夜の床しとゝに濡れて、恥は天日に曝さねば果てぬ病のある故といふに、それはと彼男も厭氣になりて、俄に療治代の一箱と轉べば、親は彼男の罹りたるを幸ひ、有無を言はさず押附けんとて、さて籍の押者は生じたるなり、更に男に就てたゞさんと其次第を告げたるに、それには彼男答へはなくて、突然娘の髻を引

掴み、この阿魔め、お役人様の前で飛んだ事を言やがつた。

(四)

○こきまぜて只一色の都の錦も、青きは柳赤きは櫻の十五區が裏を見渡せば、それゝ風俗のおのづから異なるものあり、純粹の江戸つ子は今深川に多く本所に多し、深川のは魚河岸とおなじく土着なるがあれども、本所のは然らず、眼先の一寸に明るく足元の三寸に暗き江戸つ子の、これも生存競争の理にせめられて、餘儀なく河を渡りて退轉し來れるなり。われは幼きころ深川に住みぬ、後本所に移りぬ、兩國橋より來る引越車の、見るに運好きはあらで、孰れもその傾きたるなり、昨日まで繁華の町に表店かまへたる身の、今日俄に勝手元の切詰め難しとや、初めは本所も入口の邊に價にていはゞ五圓許の家賃を拂ひ、それも叶はずなればこの度は中程の地に、家賃は三圓許庭の少々添ひたるを借受け、やがて又々かなはぬ果に、はじめて本所の本所たる奥深き處に引籠りて、月の屋根代は壹圓あまり貳圓足らず、めぼしきは纔に燈明皿の是れも塵かぬに光薄く、有りし昔を夜毎の夢に見て、猪口に肴屋八百屋の

小言を絶たぬも果敢なや。本所の文明はつねに東に向つて漸めり。

○うなぎ細手の名、今は全く忘れられたれども、本郷の開化は最も新しきものなり、書生によりてなされたる者なり、雑誌と牛肉と巻煙草との上に於て進歩したるものなり、さる頃よりわれもこの區の下宿屋に在り、下宿屋はこの區の勢力なり、商品は總べて下宿屋向なり、江戸つ子よりいへば本郷は村なり、宿場なり、衣食住に就ての誤解者が巢窟なり、肩掛着たる東髪切りたまへば、たて掛けたる霞簀の外に黒き高帽の才子、髭をひねりて待ちたまふが如きは、到底他區にては看得可からざるものなり。○威權堂々などいふ聲を本郷にて聞くときは、浦里が忍び泣きすりやを本所にて聞くときなり、其差異を簡略に示すものは、饒湯と縁日となるべし。

○二三度顔見たる娘の、名を美代とか喜代とかきゝおぼえて、美いちゃん喜いちゃん今度の折呼懸ければ、あいよと知らぬ人にも受答へしつゝ行くは、われの淺草に居りて見たる事なり。これらの娘、朔日十五日の休みには必ず行商かゝへて、柳盛座若くは開盛座に入込むにお互

ひなれば誰もとがめず、さる母の娘に誨へて曰ふ、嫁ぐに身代相應なるは何時にても得らるべし、歡樂はわかき時の事なり、わかき時は二度と無し、只それ身代を擇めと。これを吞込める娘の、一旦は町内の若い衆と手を携へて奔らざるは罕なり。

○歳は二十になるやならずの小綺麗なる娘、母と妹と一家三人花簪を内職に、四季いろ／＼の眺めはあれど貧の嵐の情や吹きかけて、あけて言はれぬ戸棚の裡に何一つ貯へのあるのならねば、活計の煙おのづから細々と身も心も瘦する程たるが淺草にありしが、島田に、銀杏返しに、さては三つ輪に、折々形は變れども娘の髪は何日見ても翠濃く、露の垂るやうたるを訝しと探れば、こは人に召ばるゝ節或處迄行きて、嬢様風、藝者風、お妾風の好に随ひ、一時間乃至二時間の損料着と着更ふるなりとぞ。風寒き師走の空、はや三十日といふに此娘給着てふるへ居たるが、其夜外套の頭巾に深く面をつゝみたる一人の男、前は井戸隣は明店ときゝしを心當てにたづね來り、酒すこし、肴すこし、母と妹は久しぶりの寄席へ遣られて、其歸りの路次口に出行く男と措れ違ひしが、何かは知らず翌日の家内忙はしく、今

一夜寐て正月元日の娘が扮粉、襟のよごれも袖のやぶれも痕を留めず、さりとて俄に美々しやと立寄りて熟視れば、帯はめりんす、羽織はきやらこなりし。

○盛りは已に杉葉隠れの、花といふほどの器量ならねど、春恰好よろしき三十あまりの女本所に住みけり。義理はり辛き世をわづかに飾職の亭主に近かれてこゝに半歳許、すゝぎ洗濯の女の腕に柳口だけは何うにとも仕法の附けど、ことし十二になれる男の兒の待常科を幸へたるに、今更學を廢めさすること口惜しと、差配捉へてしば／＼嘆ちたりしが、いつの頃よりか此家に連込まるゝ客一人ならず二人ならず夜毎變りて、急に障子の中硝子に紙を貼りしは、眼かでも知らるべし細工は粒々、仕上げたき其兒が讀書の聲、一たびは絶えしも斯くて復續くやうになりぬ。

○稱のきたなきも姉しなればゆるしたまへ、數ある中にも彼の安私窩子なるもの、わが聞知れる所にては人の妻ならぬは無かりしやうなり、淺草にても、本所にても。

○晝はぶら／＼と酒の香去らぬ荷楊子、夕暮よりにかけておのが女房のもとへ客を引き來る亭主の、胸毛こそ深けれ獸にもあらず、あさまし

き事なり。今の男の起ちかゝりて起ちもせず時移したるは、おもふに汝が引留めしなるべし何故のひそ／＼摩どと、これをはじめに棟割長屋の内と外にて、一夜に三度必ず定例の如く喧嘩する夫婦、本所にありたり。

○類はさま／＼、この泥沼に棲む蟲のうちに、も岸から岸を渡り者といふが欠眼ありて、往々家を驅出すに抱主は衣取上げ、蒲團にくるみて品物の如く座敷に放下し置き、客あれば其處へ埒入るゝといふは、淺草にてきゝたる話なり。屋根代、飯代、蒲團代とて尠少の中より差引かるゝにより、この女何事も力及ばず、生れながらの昔に還りて、常に素裸なり。

○兄は九つ、妹は七つ、毎夜兩國橋のたもとを左右に立別れて、何うぞや／＼の頭を低ぐれば、貰ひは平均拾四五錢を下らず、歸りて父の前に差出すに、人力車夫なる父は其三分の二を取りて、酒も上なるを唯飲むなり、残る一分を子に手につかみて、人形焼、雷焼又は蜜豆など、たゞ食ふなり。これは無情き母親の夫に厭きて、二人を棄てゝ走りし後におぼえし事なりと、うらめしげに、されども誇りげに、其子の語りき。

○蜘蛛、から蜘蛛よと六歳許なる男の兒の

草鞋穿きて朝夕呼び来るを、あれも人の物好なる囃衆の走り出でて素性を問へば、兄は早くも眼をうるませて、父は先頃歿り、母は今朝の床にと言ふに、いちらしやと人々寄集まりて、要るも要らぬも買うて遣れば、兄は嬉しげに空籃擔ぎ、石返りく橋一つ越えしが、其處に立ちたる女の傍へ、阿母あ、もうみんな賣つちまつたと野寄れば、女は兄の頭撫でつゝ、爾か早かつたね、今日は何處遊いたえ。まことは父は入牢の身なりしと。

○九年の久しき中風に罹りて足腰かなはず、お祖母さんは何日死ぬの、頑是なき孫の顔覗きて問ひかくるに、應々と唯點頭くのみなりしが、いよゝの時孫を枕元にまねきて、汝に面白き歌教ふべし、「わしが死んでも誰れ泣く者ないが、山の鳥が泣くばかり、山の鳥もまた泣きやせぬが、まぐら團子の喰ひたさに、言うて見よ言うて見よと其儘苦もなく果てしと。中國の人なれば、歌も其邊のなるべし。

○最愛しき孫の亡せたるは、あまりにお祖母様の命長ければなりと嫁の當り散らすに、疾く引取りたまへと神佛に祈りたれど甲斐なく、嫁の死したる後迄も猶ほ母は生存りぬ。
○右手に枕の下なる財布引握み、左手に若き

男妾の胸ぐら捕へて、跪き死したる金貨婆の最期ほど、凄まじき見たるはなしと或者言へり。

○劫の間は死にもすべし、つくばりては容易く死なずとは、古き諺のよし。

○いさゝかにても意に満たぬ事あれば、茶碗小鉢の嫌ひなく投附て、打壞さでは已まぬ旦那殿の病癒を、諷むれどもきかれぬに妾は一策を案じ、澤山投げて澤山壊したまへ、われもお手傳ひと家に大切の皿に手を掛ければ、旦那殿周章て、もう好いもう好い、以来は壊すに及ばぬ。

○今は世に亡き紳商の、新右衛門町に川様とてときめきし頃、月々の物宛がひ置く女の、常に人中にて川の字くゝと忘れぬもののやうにほめかすを、この上もなく思ひ取りて特なる心づけもありしが、聞けば其女の川の字といふは、川様の川ならず、河崎屋(河崎屋、鯉江)の河。

○困々焉、洋々焉たる池の耕鯉の焼酎目覚めて群がり來し時、誰やらいたづらに巻煙草の吸さし投入れしに、あつと一人が遠しき聲を何かとおもへば、鯉が火傷するといけない。
○龜戸天神の池にて、ある夜ひそかに大なる鯉を偷み捕りし男の、もとより出来心の事なれ

ば器なきに窮し、股引ぬぎてそれに入れ、あと先縛りて持歸る途に、手の腫ければとて熱湯見附けて飛込み、のびくするぞと流しの真中に太平樂の折柄、着物戸棚より彼の股引の躍り出でしに、これは珍事と番臺の人も驚き板の間の人も驚き風呂の中の人驚くに、其男も亦驚きて鯉ではないぞくゝと取つて押へ、襦のまま小脇に抱へて猶且鯉ではないぞと、終に股引といふこと言はざりしとなり。

○牛は犬は猫はと問ふに、もうと啼く、わんと啼く、にやあと啼くと迄は尋常なりしも、戯れに虎はと聞けば、悲しげなる女の兒のしばらくは小さき首傾け居たるが、良ありて、とらあと啼く。

○螢の火の風に消えうも知れぬとて、籠を杖に掩したるは此兒なり。嘗てわれの門三味線に探り用ひたる。

(五)

○たゞ何事も不法の世に、趣意は言はずとものことなるべし、飽くまで不法の言論を聞はさんとして、不法俱樂部なるものを發起したる人ありしが、さて其日となりて會する者十名ばかり、彼れやいかに、此れやいかにと頻りに面は見交

はせども、俗に所謂俄には洒落られませぬと同じく、差懸りての不法もなくてや各々一語をも發せず、其儘空しく散會といはんよりは、一人遁げ、二人遁げ、遂に皆こそく遁け歸りしは、不法ならぬ限りなりしと、後に其一人の言へり。

○よしや正體の枯尾花は、見るとも見ぬに興あるべし、何々の作用など小むづかしきことは言ふに及ばず、不思議は何處迄も不思議として、首傾けて語り續ぐにおのづからの妙は存するなり、われらは唯其不思議を樂まんのみと、柏木探古氏のおもひ立ちて、毎月一回、怪談會といふを催したることあり、雜誌をも出だすべき筈にて、大槻如電氏に執筆を乞ひたりし其はじめの幹事に當りたる人の、常に約束の時日をたがへしより、會も雜誌も諸其の幽霊となりて、世に沙汰するほどに至らず立消えしたるは、今よりおよそ九年の前なり。

○谷村嘉順翁の如き話の上手は、又と世に得難かるべし、翁は彼の南新二氏の兄君にて、氏にすこしく先ちて歿られたり、翁の談話は敢て奇巧を求むるにあらず、日常ありふれたる事も一たび翁の口にのぼれば、聴く者おぼえず膝をすゝむるなり、聞朝の如きもつねに之を唾質し

たり。さる紳士の翁と茶道の交ありて、月二回若くは三回、強ひて翁を晚餐會に請じたるにわれも列席ければ、贅澤もの語ともいふべき事實談を數多翁よりきゝ得て、こまかに手帳に書附け置きしが、先年誰人歟のために持去られて、翁とともに竟に還らず。

○翁は稀なる見世物好にて、代はお戻りの縁日のとても、必ず觀のがしたる事なかりしとなり。

○おもふにまかせぬ由ありて半途に廢したれども、俗語の出所をたづぬること、工商の符牒をあつむること、及び詐騙の變遷を敘すること等を、われの嘗て企てたるは、全く翁が談話に基きたるなり。

○木造吾頭といふものの事を少しく調べたるに、今は知らず五六年前にての上手は、橋物町組の新太郎、花川戸組の是れは名を忘れたり、淺草東仲町の紳名をへんて、豊、この三人なりし。

○松林伯知に朝顔酒の事を傳へたるに、即日兩國の定席なる福本に於て、夜櫻にうかれ入りたる人の、きぬくの別れに朝顔酒云々と辯じ居たるには、われも思はず失笑したり。さる小説家の櫻の盛りに、裏の圃より蠶豆採り來

て云々と書けるものたぐひなるべし。

○講釋師の中にて、最も文字あるは伯知なりと聞えしが、わがもとに送り越せる手紙の宛名に「若先生閣下様」げにこれ程あれば澤山なり。

○よき衣着て、よき車隨へたる人の、われに恭しく禮を施しければ、われも亦恭しく禮を返したるが、其人の誰れとも分きかねるに心安からず、往過きてそと供を呼留め、何方ぞと問へばいえ恐れ入ります、播磨屋でござります。即ち時藏が事なり。

○われの未文界に入らざるの前、菊之助と一つ家に起臥したることあり、日本勝の店にて屢々新藏と落合ひしことあり、菊之助死し、新藏死す、われ幸ひに技倆すゝまず、命めでたし。

○おかみと呼ぶは待合の女將よりはじまりて、出所ある事なり。今の小説家のそれとも知らず堅氣の内儀は勿論、下宿屋の女房にまでこれを用ふるは、不穿鑿も亦太甚しからずや。

○吾妻コートに五つ紋つけたるをわれは見たり、星ヶ岡の茶寮の女なりと云ふ。

○是非このたびは御紋附をと、途にて幫間のせがむに大盡うるさくなりて、つと傍らの古着屋に入り、夏冬いはず紋の着きたる羽織を皆出だせと、即座に何十枚かの價を拂ひ、幫間を願

みて、何うだこれだけで好いか。

○明治に唯一人の氣障として名高き男の、或年の暮め、小紋縮緬の三枚着といふを作りたることあり、上は一面の粉雪にて、中は雪や、疎く裾に數柑子をゑがき、下は淡雪の大きな斑に降積み、狗の子二匹戯るゝさまを笠仙に謀りて染出し、いづれの宴席に行くも、酔ひたるふりして一々脱ぎ居たり。

○ひとりとは熊谷、ひとりとは敦盛に扮し、升田屋の榎橋より萬八日懸けて、馬にて神田川を乗切らんとし、其筋へ引致てられし人あり、萬八は今の龜津の處なり。

○年月おのが旦那と侍きたる人の、まことは大賊にて今捕はれしと聞くと、而目無しと其儘家に歸らず、途より返走したる藝者、新橋にありたり。

○これは柳橋なり、魚軒醬油の濃ねかゝりしに、周章で上着の片開ぬぎしを見て、銀行頭取なる旦那殿、忽ち通はずなりぬ。

○掛引は商人の慣ひなれど、これはあまり一時の立ちしは、名だゝる木綿問屋の若隠居、おなじ土地なる妓の手を切るに、人を以て百圓にきはめ、さて自身それを携へ行きて妓に向ひ、ナントこゝでもう五圓まけぬか。

○番頭様なる者の折々日本橋に遊びて、勘定書を手にする毎に必ず曰ふ、十露盤を持つて来い。これを知りぬきたる家にては、はじめより添へて出だすなり。

○下谷にて名の賣れし妓の、一度用ひし鼻紙を再び取出したるには、さすがに客も眉をひそめたりとぞ。

○場末は是非もなし、客の手の鬚に觸りて圖らず毀したるに、髪結賃四錢呉れとて、其小女の泣きて已まざりしと。

○おきんお榮が事は、われも油地獄に記したり、櫻痴居士はこれが年代を致へてあはれ浮世中の人物の名に用ひられたり。

○石橋の田村屋が鹽煎餅屋なることは、最早知れ渡りたれども、都人ならでは解し難きふし、一葉女史の小説に猶多し、われからに島原切つての美人とあるは、西京のならず、假宅時代の新當町の事なり。大晦日に西應寺の娘のもととあるは、寺ならず、町の名なり。されども三月縛りの高利を九月に借りて十二月が期限なりと書したるは、女史のおぼえ違ひなり。

○にごりえの子供が名も太吉、うつせみの下男が名も太吉、うらむらさきの小僧が名も太吉、たけくらべの一件であげられました大工が名も

太吉。

○蛤貝知らぬ兒の、つくぐと鐘段仰き視て、膏藥があけてある。

○有合なれどもと、蜆汁を出したるに、がりがりと激ぐるみ噛碎きて、これは國には御座りませぬ。

○えだ豆の具足煮といふを知らず、こは尙ると覺えたりと一書生の居丈高になりて、下宿の女房呼びつけ、おれは馬ではないぞ。

○汁は蘿蔔、煮附けは鹿角菜、このほかに望なしと出来星紳士の或會席茶屋に来て誂へけるに、主かしこまりて調進し、さなきだに此家は廉ならぬ魚鳥の五倍を請求しけり、紳士頗るひるみたれども然り氣なく外に出でて、人にむかひ、君は未彼處の鹿角菜を知るまい、あれを喰はんやうでは本物でない。

○をとゝし出でたる文學士の、俗曲をしらぶるときとて、都合に依りてはわが年來の材料を参らすべしと、其人の友に就てしらべは何からと質したるに、先づ初めは常磐津から。

○今ひとりの新しき文學士も、俗曲研究に熱心の由にて、これは珍書とあるを何かと見れば、宮闈千種通稱。實は兩八の稽古本たるに過ぎず。

○十尺見は十寸見の書損なるべし、鴉鳥集とまでは言はずもがな、物議りのためには幸葉集十山集などもよかるべし、醒雪氏は近松の玉子酒生美酒の弄語に、われの敬服せるよし記されたれども、われに於ては然るおぼえ曾て無し、多分何をか氏のおもひ誤られしものなるべし、われは「裾へ柔がほととぎす蒲團かけたる」などいふ程なるを、先づく好くなり。

○少しは名のある由なる新體詩家の、何々集とか題したるものを新聞紙上にて見たるに、種は懐中の活版本の小唄をいづれも焼直したるものにて、「籠が小籠で筋斗うたれぬ山雀を、時鳥に改へたる如きは中にても拙の極なり。

○「おまへは濱の」に擬したる新體詩を、何やらにて見たり。作る人も作る人なり、載する人も載する人なり、調子といふもの毫もわきまへず。「小町かもへば」の歌を取れる如きも、唯何かなしといふに過ぎざるべし。

○「朝顔がたよる竹にも振放されて、うつぶきや涙の露が散る」とは、かの東山の唱歌とともに、山陽の作なること、人の知る所なり。「四書を読み」の作者なる中島棕陰にも、春の袖といへるあり、左に録す。

今はおもひのまゝにもなりて。昔に匂ふ花

の袖。誰とかさねんゆき丈も。ちやんと袖ひしはし紙に。お客の名をばかきぞめの。春のなきけの結び昆布。縁と月日待ちおほせたは。嬉しからうぢやあるまいか。

○よき作にはあらねど、伊勢古市、備前屋の染吉といへるが歌に、

玉くしげ二見の浦のなみならぬ君が情の嬉しきはやしほにまして朝夕に祈りまゐられ候かしく

○「散るが無理な敷散らすが無理敷無理と無理とで出来た世に、無理がなければ花もない」。これはさる頃或人のもとへ、われの書きおくりたるものなり。

○はじめの日はイの字、次の日はロの字と、一日に片假名一字づつ書きおぼえて、無筆なりける女の、遂に母のもとへ手紙を出すやうになりしが、廊にありしと聞く。

○これも里の女の、たえて算盤といふことを知らず、寸燐を二つに折りて、大を一錢、小を五厘とし、いかなる時にもそれを並べて、一々細かに數を讀み居たりと。

○假に明治を三段に別つべし、上の十年は明治後地方の者多く、中の十年は美濃尾張の者多く、下の十年即ち當今にては、山陽道かけて九州の

者多しと、或人言へり。

○縣とのみにては定かならねど、郡、區、町、村と順次に區分し行かは、それなる出稼人の多き地は、其前に於て、私生兒の多き地たりしなるべしとおなじ人の言ひしも、一理ありげなり。

○女より客におくりたる、客より女におくりたる、それらの文微を、傳を求めてわれの數多蒐めたるは、やがて何事を見出さんとてなり。商家の息子なりとか、文の末に春雨の句をかきて女におくりたるが、翌日はがきを以て、「や」は「の」の誤。しかも新聞紙とおなじく、圈點を打ちたり。

○今迄に得たる文の中に、客の方の秀逸は、主家を逐はれて近江に行きたる男の、八景をよみ込みて女に恨を述べたるものなり。但し羅紙七枚づき。郵税六錢。

(六)

○よしわれに著述ありとも、活版本を以て世に傳ふことをなさざるべし、われは唯寫本を以て傳へんのみと、著作家ならぬ人の、今の著作家に向つて語りしとぞ。

○炎天に飄かたげて人の行くを、何れへと問へ

ば、向島邊へといふ、何の御催しと重ねて問へば、今が合歡の花の盛りと思つて。

○人の親目く、さる頃會社へ用ありて外人の來りけるに、能く出でて應接する者なし。幸ひにわが倅の外國語に熟せるによりて、通辯を命じたるが、この時の如く困りたる事はなしと後に倅は言へり、何ゆゑとなれば、倅の修めたるは英吉利語なるに、來りたるはそれと異りて、阿米利加人なりければ。

○佛學者と漢學者と連立ちて途を行きけるが、やがて夕やけの空を指して、あれが菩薩といふのですなと佛學者のいへば、漢學者はしばしば耳傾けて、ボアイ、成程、佛蘭西では爾申しますか。兩學者竟に何事とも曉らず。

○所謂紳商の間に、ことさら解しにくき語を造りて符牒に代ふること、一時流行したり。オリエンタルハウスとは、吉原仲之町の引手茶屋、東屋が事なり。こは夜と朝の譯者益田氏の發意に係れるなりとか。

○兩國藥研堀にもと水明樓といふ待合ありたり。大阪なる富田屋の奴の來りて開けるものにて、今は木挽町に移りて旅館となれり。嘗て岩崎氏の濱田氏等とともに、氏名を告げずこの待合に遊びて、首尾克くつまみ果せたる氣の、

互ひに日顔に笑ひ興じたるが、いざお立ちとなりしに、内儀は遠早く庭に走り出でて、車夫を呼んで曰く、岩崎様の御家來様、さすがに皆々ぎよつと立止まりしとなり。

○今は亡き川田氏のこれも詐りて奥州商人と稱し、淺草大代地の待合名倉といふに到りしに、こゝの女將は聞ゆる變通なれば、さまざまの人名をつらぬるに可笑しくなりて、川田さんを知つて居るかと言へば、知つて居りますとも、昨日もお入來になりました。

○鳥類魚の小さきカイヅといふ、これをケイツといふは例の江戸訛なり。長唄の勸進帳にカイヅの浦とあるは地名なるを、或小説家の江戸がりで、歌うて曰く、ケイツの浦に着きにけりと、一座皆くつがへりぬ。この小説家は、山谷の重箱といふべきを、麵桶といひしによりて名高き人なり。

○どゝく(都々逸)る、ちやづ(茶漬)る、などいふは落語家より始まりしものなるべし。下足をゲツ、澤地をタク、若くは勘定をデヨカンなどいふは素より職人手合のことなれども、近來は甚しくなりて、ごまかすといふ可きを、ごまけるなどいふに至れりとぞ。

○汝士分の面目をおもはゞ、かの流行言葉とい

ふを耳にすると、決して口にする勿れとは、わが物の師の堅く誠めたまへる所なり、この頃わが談話なるものの中に、「おつ」といふやうなる語を見受けたれども、そはわが口より出でたるにあらず。

○翔句といふ男、職を免ぜられたりとして、年の瀬や賣り残したる日本刀と、わが許へ書きおこしたり、われ直ちに、賣れ残りたる二本棒と、其儘朱を加へて戻したるに、幾くもなく復し出されて、さて任に何處にといへば、臺灣に行きけり。

(七)

○久しき前、われは某會社の巡回員に、後或人は各地の小學教員に、或人は地方の新聞社に、それ〴〵手を盡して託したれども遂げざりしは俗語蒐集の事なり。今又あちこちに廣告見ゆ、これが完成はわれらも望む所なり。

○注意せられたきは元唄と替唄の差別なり、ふと見たる日に章句のうつくしきため替唄のみ取りて、よく聴かば曲調の耳にたいしかるべき元唄の捨てられたるが如きこと、今迄に勘がらず。

○この程の人の俗曲を論ずるを見るに、多くは

絃のしらべ歟、松の葉の端本か、太甚しきは端
唄袖かゞみ程のものを歟に據れるに過ぎず。さる
人のこゝに久しく「中の拍子扇を求むれども
得ずと、眞蹟になりて語れるをかし。」

○猶可笑しきは或新體詩家の、隣座敷に藝者衆
の唄ふを聞けばとかきて、「今度ござらばもて
來てたもれ」の歌を擧げたる事なり。

○おなじく今は新體詩家なれども、やがて小説
家になるゝ由なる何がしの文學士の、君と別
れて松原行けばの歌を、萬葉のよりもあはれ深
しとたゝへられしにも拘らず、其新作に「ひと
聲高く嘶けば、あなや梢のさくら散る」といふ
を、無論點附きにて出されたり。胸が勇めば
花が散るの俗語よりも、哀れ深かりしにやと、
これををかし。

○露伴氏よりきゝ得たる歌に、「西がくもれば
雨となる。東が曇れば風となる。千石積んだる
船でさへ。波風荒けりや出て戻る。儂ちやとて
も其通り。縁がなければ出て戻る。」

○西は雨、東は風のなだらかに起りて、突如、
千石積んだると言出づる趣は、恐らくは今の
新體詩家の、未曾得せざる所なるべし。

○川風寒く千鳥啼くといへば、皆端唄なりとお
もへど、こは貫之が「おもひかね妹が行けば」

の歌より出でたるなり。今の暇ある新體詩家
は、俗語に就てかゝる類ひを多くにはおよばず、
いさゝか取調ぶるも、益なきにはあらざるやに
思はる。

○最も近くのこれる投節に、「葉うら葉表葉お
もて葉裏、萩の葉うらに鳴ききりくす」といふ
がありたり。彼の門を入るよりはじめて、水道
尻に到りて唄ひ切ることなりしとぞ。

○うそに涙が出るならば、さえた月夜に雨が
降る「云々」といふは、名高き二上り新内なり。こ
れをホウカイ節とかいふものに唄ふを、このご
ろ町にてきゝたり。疎ましき限なり。

○わが知れる俗語の中に、おもひ出す毎に理
窟の極とおぼゆるは、「笠がよう似た清十郎が
笠に、笠が似たとて清十郎であれば、お伊勢參
りは皆清十郎。」

○後の都々逸にはこれにひとしき一體あり、「痘
痕あるので人間らしい、犬に痘痕があるものか」
の如き、是れなり。

○「下着にのこる移り香」と、四言にて止めたる
調をきかんとて、先年上方唄の上手を尋ねたれ
ど、この地にはなかりし。

○巢林子が作にも、「それは皆婦言」「たとへば
命抱ち」と、疊みかけて四を用ひたるものあり、

猶異りたる例もありしとおぼゆれど、われは今
それらの書を持合はさねば、餘は擧げず。
○われの尚尋中に通學せる頃のことなれば、年
は十五六なり、友なる上田氏は歌舞伎新報の愛
讀者にて、しきりに世話狂言の事を取しらべ、

われは俗曲に關する事ども、別段これぞの考
へもなく蒐めたるが、長唄及び富本、常磐津、
清元には外題附けといふべきものなきまゝ、一
冊の手帳に書き附け置きしに、この程不圖行幸

の底より出でたり。これは稽古本として今に傳
はれるもののみなれば、かの聲曲類纂のとは同
じからず、幼き頃のわざとて確とは言難きも、
其十の六七迄は擧げ盡せりと信じ、殊更に寫し
て左に出すなり。但し注意を缺きたるもの三つ

あり、一は作年月を記さざることなれども、こ
れは稽古本になきたため、何の辨へもなくたづね
ざりしものなるべく、二は狂言作者の慣例に
て、題の五字七字にかゝづらひ「茂」と書きて

ナツコダチと訓ましむる如きことあるを、わが
手帳には其振假名を脱せし事なり。三は、たと
へば燕鳥故郷軒とのみにては、いかなるもの

とも分き難きに、梅川忠兵衛といふやうの註
を入れ置かざりしことにて、其當時は記憶し居
たるなるべきも、今にてはわれも大半忘れたり。

いづれにも精しき人の、猶よく訂したまはんことを祈る。

長唄の部

勧進帳

老松

対面花 春駒

春調 娘七種

拍子舞 名取種

花車 岩井扇

狂亂雲 井袖

狂亂左 當升(幸三)

雛鶴三番 隻

種時三番 隻

再春 茲種時(禮田)

わらべ獅子

越後獅子

俄獅子

濱松風戀 歌

傾城道成寺

百千鳥 娘道成寺

一奏 現在道成寺

風流妹 春の柱立

正札 附根元草摺

草摺引

隈取安宅松

女夫松 高砂丹前

今様春駒

亂菊枕 慈童

教草吉原雀

三升猿 曲舞

狂亂吹雪の雛形(近松)

廓三番 隻

今様四季三番 隻

呼出三番 隻

英執着獅子

相生獅子

枕獅子

權獅子 最辰物

姿の鏡 關寺小町

二人道成寺

京鹿子 娘道成寺

いろはの比翼紋

初昔文 仲立

御最辰根元草摺

菊壽の草摺

新草摺引

吾妻八景

二見湯 磯の濡衣

春の色

みめより(左安)

廓の禿

鶴龜

秋の色 種

織殿(三)

唄上るり(如川)

初子日(仙劇)

松の縁

七福神

木賊刈

四季の橘 久

紅葉がり

天人羽衣

さごろも

驚娘

ゆかりの月

臨の渚

秋葉籠

もみぢ葉

明の

蝶鳥千歳 靡

巽八景(吉川)

雁の文

千代の春

小原女

羽突の禿

石橋

室の八重咲(日)

錦のはた 織(藤)

追羽根

初しぐれ

百夜車

白酒賣

面かぶり

高尾さんげ

新紅葉狩

新羽ごろも

新まつかぜ

うしろめん

おぼろ月

江の島

五大方

仇名草

亂れ鳥

まん菊

びんづる

さかづき

くろかみ

昔寫繪

たみざん

高砂

白妙

ねこのつま

長五郎紙すき

花錦 嫩丹前

兩洲 隅田川

嫩染分紅葉

女伊達 菱花

夜鶴綱手車

男舞 相生

釣狐 春亂菊

小裾 重

乗掛 情の夏木立

其容形 七枚起請

七枚 緋花 委繪(上)

紅葉袖 名残 錦繪(上)

舞扇 蘭生梅(幸三)

法花 四季臺(左安)

小夜衣

きせう

水かどみ

三勝道行

四つの袖

ふたつ文字

寶船

わがこころ

門太郎 名残

金屋 太郎前

准心の引綱

寫繪 雲井弓

櫻草 娘番書

助六 雪手傘

衣被 思破車

初咲 法樂舞

柳絲引 御攝

關東 小六後雛形

愛敬 有哉稚萬歲

我介子 戀の合槌(禮田)

八重霞 花掛合(上)

七小町 容彩四季(久助)

梅開 冬至樂(日)

花桂 照楓奏(如川)

外記節 猿

其面影二人枕久

雪月花詩繪厄(上)

花簾層色所八景(如龍)

返すく餘波大洋畫(如龍)

拙筆力七伊呂波(如龍)

辻花七化粧

其九繪彩四季櫻

三人形紅の彩色(如龍)

七重咲浪花土産(如龍)

七字の花在 菱繪

九變化(如龍)

桃櫻戲暖幕

散花四季の花道

老松

年朝嘉例 壽

羯鼓寶錄壽都錦(如龍)

道行比翼の菊蝶

道行野邊の書道(如龍)

道行榮種 棠(如龍)

道行戀 橋づくし

戀 環 菊

女鳴神濱川帽子

同 傀儡師

閑茲 姿八景(如龍)

月雪花名殘 文臺(上)

七所 初鐵漿(如龍)

四季 寄三 大字(上)

深山 櫻及 兼樹 振

寄三 津再十二支

六歌仙 容彩(如龍)

八重九重花 菱繪 三三治

五月菊名 大津繪

遅櫻手葉 七文字

八朔 梅月の 霜月(左安)

寶來宮

御世 榮益 稻富 種

今様 十二段

道行垣根の 結綿

道行念 玉蔓(上)

道行戀 飛脚

幾菊蝶 初音 道行

稚女 夫手 管 掛 簾

茜染 野中の 隠井

夫婦酒替 中件

七重咲浪花土産

眞似三升 姿八景

達模樣 吾妻八景(如龍)

夜花 姿の 三日月(如龍)

春夜障子 梅

十二段 君が 色音(如龍)

新曲 高尾 懺悔(上)

席書 扇繪合(上)

全盛 操花車

妻夫事 雨柳(上)

と 連理の 橋

茂 懺悔 陸言

散花 花貌鳥(上)

棲 賽 殿 振袖(上)

新曲 神樂獅子

常磐津の 部(前)

老まつ

積 戀雪 陽屏(如龍)

其儼 旅路の 嫁入(如龍)

姿 花鳥居 色彩(上)

倭 假名色 七文字(上)

神樂 飄雲 井曲 後(上)

名酒盛色の中波(如龍)

瓦 屏 橋 女夫主 從

俠客 形近 江八景(如龍)

四季 詠寄 三 大字

染 蠟 莖 浦の 彩色(如龍)

殺生 石十三 怪

在 姿 淨瑠璃 世界(上)

彼 狂夫 畫集(上)

柳 絲 戀 苦環

其 妹 春 花 麗(久助)

其 係 朝 間 獄

徒 髮 戀 曲 者

櫻 草 對の 鼓(如龍)

麗 容 錦 畫 姿(上)

月 柳 廓 髮 梳 河 七

四十八 手 戀 所 譯

子 寶 三 番 叟

願 絲 絲 苧 環

其 常 磐 津 仇 兼 言(上)

八 百 萬 圓 生 梅 枝(上)

千 種 野 戀の 雨 道(上)

夜 鶴 思 雪 解(上)

帶 文 桂 川 水(上)

閑茲 姿八景(上)

七枝 繡花の 姿繪(上)

芝八景(三條)

桃太郎(如龍)

戀 中 車 初音の 旅(上)

忍 夜 孝 事 寄 寶 助

花 舞 臺 霞 猿 曳(上)

狂 亂 娘 撫子(三三治)

成 旦 福 是 內

乘 合 船 惠 方 萬 歲

散 花 左 安

節 句 遊 戀の 手 習(上)

初 陣の 兒 錦

道 行 丸い 字

其 扇 屋 浮 名 戀 風

明 鳥 夢 泡 雪(佐々木)

辰 色 色 相 眉 浴 助

新 曲 胡 蝶 夢(上)

今 様 高 野 物 狂(上)

恩 愛 瞋 闔 守(上)

蜘蛛 絲 梓 弦(如龍)

帶 披 小 蝶 昏(兵衛)

初 日 宵 庚 申

戀 弦 結 夢 旦

四季 寫 土 佐 畫 拙(一風)

巽 八景(如龍)

三 津 朝 床 販 販 觸(上)

夜の 鶴 雪 驚(上)

心 中 浮 名 の 絞 鞘(中村)

內 裡 模 樣 源 氏 紫(上)

唐 人(南正)

歲 旦 惠 方 の 寶 船

三 福 對 和 歌 姿 畫

三 世 相 錦 繪 文 章(上)

茜 染 野 中 の 隱 井

八 大 義 士 譽 の 勇 猛

道 行 三 度 笠

其 姿 花 圖 繪

戀 娘 昔 八 丈

道 行 榮 花 月(上)

今 様 翠 月(上)

色 直 高 毛 毬 奈 河

棲 重 裕 羅 衣 助 助

狂 華 法 手 向 西 郎 屋

帶 文 川 傍 柳(三三治)

比 翼の 初 旅

四季詠(㊦)の歳(上) 四月天王八江山入(如城)
后月酒宴の島亭(上) 松色 操 高砂(上)
禊 紋日雛形(上) 神路山色 琇(上)
浮名の散書(左交) 道行面影草(上)
兩顔月姿給 初櫻淺間獄(金八)
筒幹色 水上(上) 花來塙 色鶴
近頃戀世語 若木花容 彩四季
男作出世の貝歌 花吹雪富士 菅笠(三)
燕鳥故郷軒(手合) 紅葉傘 錦色木(新刊)
清元の部
梅の空
深山櫻及葉樹振 山歸 強 桔梗
明烏花 溝衣(壁) 簀 花手向 橘
其小唄夢 廊久助 由縁の曆(上)
道行浮鴨 道行旅路花簀(三升) 廊花對 編笠(上)
メ能色 相圖(上) 初霞淺間獄 袖浦誓 中僧(上)
后月名残の島堂 再三歌舞伎花轅(上)
花江戸繪劇場 彩(上) 再三歌舞伎花轅(上)
再春 松 種(同) 四季三葉草
傀儡師 逢見 愛井(宇) 彌生の中淺草祭(如城)
闇海夢 手枕(上) 朝日影段の隈取(上)
おどけ俄者球取(上)

優平家後段景事(上) 大和い手向 五字(金八)
江戶櫻衆袖土産(新刊) 色彩間刈豆(上)
山解 深川(中補) 俠客近江八景(上)
袖浦涙 春雨(北北) 絲の五月雨(久助)
重棧閣の小夜衣(如城) 能中綱攝の花轅(上)
六歌仙 容 彩(兼三) 須叟三保浮氣質(上)
五諸車引哉袖棲 二面東 寫繪
道行初平旅 夢結露 滿事
戴鶯吐 別路 梅柳中宵月
貸浴衣汗 雷(新七) 由縁色繩紫(上)
日月星夜綴分(上) 源氏供養由縁紫(上)
(八)
○比較的、場末に今多きは常勢津の師匠なり、
常勢津がこの都を支配したる 頂點は天保なる
べし、後漸く清元の侵す 所となりたれば、其
中央を去れるも故なきにあらず、今の清元の師
匠の、これも比較的年齢の若きもの多しといふ
も、同一理なるべし。勿論こゝに師匠といふは、
いづれも女のみなり。
○本所に居たるときは、向側に清元の師匠あ
りたり。淺草のときは、裏に常勢津の師匠あり
たり。さる頃より丸山に轉れるに、見れば前に
長唄の師匠あり。

○長唄 若くは清元常勢津は、むぎと眞似事にな
り難けれど、其點に於て義太夫は易きのみなら
ず、都鄙共に調子に大甚しき差異なければ、各
處の宴會に必ずこれを聴くは、やはり汽車が持
來りたる流行なり、江戸敗北の一徴候なり。
○猶敗北の例をいはず、浪花節といふもの、都
の中央にては大方じといふに折々かゝるのみな
りしが、この程は宴席の餘興にも召されて、これ
が寄席に旦那様與様の黒のお羽織を見ること、
敢て珍しからずと聞く。
○されば流行のおそろしきことは、これにつれ
て昔乞所の唄なりしものをも、今は玉簾の内や
ゆかしき高樓にて、懼りなく唱ふなり。
○よき歌ありともおぼえねど、淋しき座の慰み
といふは、いと趣きものなり。上野にありける
を青々園氏は書寫し、上田氏は去年人より購ひ
て藏し居れり。
○其手に三絃をも學ばれしほどなれば、大槻如
電氏の歌曲に精通せるは、言はずもあるべし。
されどもわが知れる人にて最もよく涉獵りつく
したるは、幸田露伴氏なり。
○うち萎れたる浪人の出に、「ひとり來てふた
り連立つ 極樂の」の唄を用ひ、「清水寺の」といふ
とき花道よき處にとまりて、徐ろに振仰ぐや

本釣鐘一つ打ち込み、「鐘の聲」と唄ひをさめた
るは、わが觀たる芝居の中にて、すぐれて風情の
好かりしものなり。十餘年のむかしなれども、
今に眼に映りて、折々憶ひ出ださる。

○この唄は園八のとりべ山なり、人皆の好くと
おぼしく、或老大家はこれを小説中のあしらひ
に取りて、女肌には白無垢やと書くべきを、
男肌にはと書くたれり。

○ひく三味線は祇園町と、かくれんぼの表紙に
したるは、園八のならず、さらへ讀より出
したるなれば、所謂上方唄のなり、おなじく鳥
部山の一句なれども。

○初心の人の床に上りて、用意の一腰口とい
ふべきを、用意の一口といひかけてハツと心づ
き、しばし躊躇ふ折しもイヨ喰つたかと誰やらの
聲掛けしに、はからず釣込まれて諸共に、イ
ヨ喰つたか。折角の明烏も、それにて名題の
夢泡雪、まふまふ消了りぬ。

○素人の芝居するとして、白石噺揚屋の段を出し
たるに、ところどころでは物言其やうにと
いふとき、襦袢の裾ふまへて宮城野の大の男、
どんと音するばかりに仰向に轉けしが、起上り
て又更に、其やうに笑はぬもの。これは元藝研
堀なりける常磐の主人なり。

○妓樓の面々打寄りて催したるとき、何中米の
主人とやらんが、然らば後刻と時代にいふべき
を世話にいひたるため、しらせの木の入れかね
て穴の明かんとしたるに、腰なる扇子を抜取り、
さつと開きさまに自ら口にて、チョーン、御意
得るでござらう。

○高梨氏が根岸座の興行にも、をかき事数多
ありたり。扇や熊谷に扮したる富貴樓の主人
の、いざ笠を脱るにのぞみ、見物のわや／＼言
ひければ、俄に逆上せて忘れしか臺詞出でず、
顫へながら唯立ちたるのみなりし。

○今は或會社の重役なる人の、其とき十段目の
久吉を勤めけるが、あわて、草鞋をぬがず二重
へあがりしを、人の草鞋々々とはやしけるに心
おくれて立上らず、あと／＼と其儘ゐざりて
引込みたり。

○彼のトツタリは本職を儲へることとて、二番
目の新作物に、この人刀を振上ぐるより早く皆
驅るに、やがて後見に切掛けしが、これも勘五
郎なれば亦能く驅るに、いよく道端のなくな
りて、遂にうしろの黒堀に切附ける。

○これは紳士連のにはあらざりしが、チョンと
手拭を取りしに、肩にはかゝらで、其處に曳き
わたせる鐵線にかゝりたり。生憎其人の脊低か

りければ達かず、ふはり／＼と風に吹かれて幕
になりぬ。

○さる年新當座にて、對面一幕出したることあ
り、今度の曾我は團十郎の一世一代ださうです
と或批評家のいふに、左様ださうですとい
へば、それで五郎は誰が勤めるのです。

○大向とて捨つ可からず、面白きことを言ふも
のなり。嘗て歌舞伎座にて、例の申上りの出で
たるを見て、忽ち呼んで曰く、往復はがき。

○言語の上より近松を研究すと呼ばはれる人
の、國性爺は知らざりけん、天網烏をよみて、
李縮天といふこと腑に落ちず、神か佛かと問ひ
けり。

○月のかつらとあるべきを、今の鰻刻本のこと
なれば、月のうつらと誤りたるに、或國文家の
其上にも誤讀りて、逢ふ人毎に問うて曰く、月
の鰻といふのは何でせうか。

○試験委員の犯すといふ字を出したるは、オと
ヲの假名遣ひをみんとてなり。一生あり、恭
しく傍訓を施したるを見るに、むじな。

○何故これがムジナなりやといへば、才扁なる
によりて、一生懸命考へたるなりといへり。
○シンティシ、シンティシとさる老先生の眞面
目にいふをきゝて、新體詩家の頭を抱へざるは

無しとかや。

○わが知れる建具やにて、七言絶句をよみ下したるため、店の出入を差留められし男あり、げに腕をいへば、よき方にてはなかりし。

○歳は十一なり、夜盡なしの坐睡を常に笑はれ居たる小僧の、あ、あ、と突然大聲揚げたるを、又かと主人の叱れば、いえ居睡ではござりませぬ、夢を見たのでござります。

○着物の數有たぬほど不幸なるは無しと、世馴れぬ女房のくどくどと嘆くに、儼共を御覽なさい、小遣錢に困ることもござりますと隣家のが慰むれば、何の貴女、何家だつてお小遣ひは火鉢の抽斗にあるぢや御座いせんか。

○やりくりにて兎も角も送れる人の妻の、アイスクリームといふは、たゞ高利貸の異名とのみおぼえ居りぬ。知合のもとに行きたる折、夏は馳走もなし、アイスクリームなりとも言はれたるにハタと憤りて、あなた、嘲弄なすつてはいけません。

(九)

○政論擔當の約束にて、初めて新聞社に入る或英法學者の、はや机に倚りて筆取上げたが、忽ち隣席の記者を顧みて曰く、一體現時の形勢

はどんなものですか。

○久しく官に在りて、後新聞社に入る人の、ルビといふは別の物なるを知らず、このルビには假名の附いた活字が無いのかと、手痛く組方を叱責したるに、さすが組方も黙しかねて、そんなものは有りませぬといへば、逞しき虎髯逆に撫でつゝ、其人いよゝ居丈高になりて、早く會計に告げて買つて貰へ。

○これも初めて新聞記者となる人の、凡そ四五十行程なる記事を請取りしが、馴れねば筆の運び難く、やがて半に至りて編輯主任にむかひ、明日では不可ませぬか。

○わかき記者の名を賣るに忙はしく、他新聞より抜きたる記事のものにも、猶ほ誰々抄録と書きけり。

○鉛版にて記されたる廣告を、一々丁寧に校正し居たる人あり、後に小説家になりぬ。

○新聞記者といへば、何の事情にも明るしとおもふは不覺なり、彼の所謂聯種記者の如き、時の内務大臣の名をすら記憶し居らざるもの、わが知れる所にては、多數なりき。

○已に前回に於て死したる人の、又々後回に現れ來るに、讀者の怪む所となりて、甲は乙の誤りなど言附むる如きは、一頃の新聞小説

に珍しからぬことなりしが、嘗て或人は其續物中に啞を出し、はからずそれに口きかせたるを翌日になりて心つき、周章で、正誤文を掲げて曰ふ、前號の紙上啞の言語を發したるは全く筆者のおぼえ違ひなり、今後は誓つて物言ふことなかるべし云々。

○人のしろるりと書けるを見て、こは何ぞとたづねたるはさる國文の教師なり。

○桶の底破れて水の流れ出づるほとりに、ひとりの女付めり。傍なる井戸釣瓶に牽牛花卷きつきて、上に細き三日月出でたり。これは今の或浮世繪師の、千代能をとたのまれて揮毫したるものなり、すさまじと謂ふべし。

○草いろ／＼の花の濃きも淡きも、見るに由なし、常に變らぬめでたきを出したまへと盲按摩のいふに、さらばと植木屋の仙人掌をあてがへば、やには手に引取りて、痛々、お客様だ惡戯をしなさんな。

○鶴龜ならねばをさまらぬ老公の、今度も愁嘆場があるかとたづねらるゝを、さりとは茶屋男のおもひ到らず、しんみりとした幕ばかりでございますと言へば、それでは見物は此次に致さう。

○あの奴をと紳士より望みて、已に一夜の約定

もとゝのひしが、いざとなりて待合の女將にむかひ、病ひ氣はと問ふに大丈夫と答ふるを、ほんとうかと紳士の念を入れば、ほんとうですとも、皆さんが爾仰有ります。

○海外留学のため、日ならず發向と定まれる男の、送別會の歸途友に嘯きてこの儘異域の鬼とならぬともかきらず、是非に今宵は連れたまへといふを何處へときけば、日本の女知らぬは口惜し。

○京に遊びて金銀閣寺知らざらんもと、少しは生利なる旦那衆の件連れて行きしに、例の茶出されて喫む術を知らず、しばらく瞻め居たる折しも山高帽の大官人らしきが令嬢とともに入來りければ、これに倣はばやと待つにおなじく茶碗を前に置きて、たゞ瞻むるのみなり、果てしなれば左手に持ちてぐいと飲むに、彼方にも亦左手に持ちてぐいと飲む、即ち四人一度にぐいと飲む。

○深く妙法様に歸依したる婆の、未曾て歩酒といふを見たことあらず、人より贈られて、これは西洋のお水と三拜しぬ。

○去年の夏の夜、森氏と連立ちて青木堂に立寄りしに、續いて入來れる二人の晝生風の男、われらを見るより指もて桌子に文字かいつけ、し

きりに點頭くを少し仰上りて何かと覗へば、右轉外左正大夫。われらは早々退出したり。

○あま蛙一冊たまはれと昔馴染の言談せるに、生憎手元に無かりければ、田中屋といふに行きて求めたり。こゝの名代嬢の太く打笑へるをわれは何とも合點ゆかず、秋骨氏にたいしたるに、それでも著者ではございませんか、寫眞でわかりますと娘の言ひしとなり。われこれを知いて、復びかしこの店に立たず。

○われ嘗て人々と戯れて曰く、小説家は小説家の徽章なかる可からず、天狗にては稍威嚴に過ぐ、宜しく令して潮吹きを被らしむべし、とうとう彼奴も面も被るやうになつたなど、なかなか面白かるべしと、今は早其要もなくなりぬ。神田は法律連中多ければさのみ事なけれど、本郷は最うるさし。紅葉氏に聞くに、牛込も同様なりといへり。

○ひとしく褒めるにもシナのあるものなり、成文堂の店頭に立ちて、春の令は下繪もうまいと言ふは、いづれあの薔りの學生なり、これには坪内氏も恐縮なるべし。

○いづれの若旦那かとおもはるゝ人の、藝者仲間を狩催し、意氣振々、われこそ正大夫なれと殊更名告らるゝを、恰も隣室に在りて晝食を

なし居たるわれの、聞くともなくきゝたる時は、冷汗忽ち背に傳はりて、おのづから身も縮まるやうの心地したり、今考ふれば、其人儘かに、われよりは美き衣着け居たりしに相違無し。

○煤掃なればと辭むもきかず、朝より妓樓に推登りて、疊十數枚積重ねたる上に大胡坐をかき、こゝへ酒よこせ、肴よこせ、第一は女よこせと喚き立つる人の、やはり正大夫と號し居たるよし、程經てわが知られる役者の話にきゝたり。

○それがし、くれがし、相携へていつくの夜、某樓に眠りぬと探偵の語るに、それがしは濃厚、くれがしは詩直、共にわれらが先輩なり、一人々々聞くも猶信す可からざるに、況んや二人連立つといふに於てをや、決してさる道理無しといへば、それは知らず、帳簿を檢するに明白に記入しありたりと言ひぬ。これは前とは異りて、おのれらが名をつゝまんがため、新聞書の奥附などにて見置きたるを、唯一時許稱するなり。たとへば宿帳に加藤清正、武藏坊辨慶、西郷隆盛と書したりと落語家のいふに似て、其現存者たるだけに、非なるものなり。

○すまじきものは當仕へとこそ聞け、虚名のわれらを苦むるは今更にあらず、新小説の寫眞の

先後を争ひし人の如き、何の意ともわきまへ難し。

○冷かにあつかひて還したる初會客の、後に新小説の寫眞に據れば、當今知名の作家なるに女は呟きて曰ふ、これならもう些と何うかして遣ればよかつた。

○これは貴郎でせうと又或作家の寫眞突附られて、ハツと思ひしも他人のそら背、おのれならざといへば、女はやくしばし見較べて、左様でせうね、よもや此人が僕達のところへ来る筈が無からうから。

○或自稱詩人の、何々はおのが作なりといひしに、あとにて女は之れを朋輩に話げて、馬鹿にして居るよ、あんな奴に何ができるものかね。

○其人なりとは知る由なければ、お聴きなさいよお聴きなさいよと屢々搖起すに、遂に一夜を自作の小説に悩まされ通したる人あり、讀畢りて女は曰ふ、思つたよりくだらない。

○藏前なる古本屋にて、人の小説買ひ居たるを何の氣もなくのぞき込みしに、この邊ならばお安うございますと小僧の差出したるは、無残やわが著書なりけり。

○われの國會新聞社に在りける日、甲府の人のよし來りて面會を索むるに、河用かと立出づれば、先生は御出釣なきやといふに吾なりとは少し躊躇はれて、おもはずハイと答へたり。翌日わが住居に來れるに再われの立出づれば、今日も御不在なりやといふに進退谷りしが、實は旅行中と答へたり、こはわれの白き髭もたざるによる事なり。

○小説志願の趣長々と圖立て、諸貴殿の初學心得に依るとすれば、凡そ何箇年ほどにて成業の見込なるやと、長崎より照會し越せる人あり、返信用の切手を添へたるにわれも餘儀なく、貴所方の御覽せらる可き品にては無之候と答へて、纔に呵責をのがれたり。

(十)

○鈍きは耳なり、馬にだも及かず、馬は能く自ら耳を動かし得る也と或人言ひしが、否も亦發達せざる者の一なるべし、今の人の料理を論ずる、多くは標準を自家の臺所に取來るなり。

○島村を言はんと欲せば、八百善を知らざる可からず。八百善を知らざる人の、島村をいふが如きこと、このごろ何の社會にも流行なり。今は島村も太く亂れぬ、若八百善の境中休業を廢することあらば、日本料理は早滅亡と謂ふも不可なし。飯を喫する者多かりし常盤家も、今に

ては妓を聘する者多き常盤家となりたり。

○くだりて植半なる老女將の、おのれも客控へて一々檢し居たるは當然のことなるに、さりとて古風と既に五七年前に於て嘲されたるが、今は客のみならず、名ある會席の主人にて、料理を解せざるもの甚多し。

○昔深川にありきといふ魚子が賣場は、おもに湯殿など手廣くしつらへしに基のせりとぞ、即ち客の漸く雜販になり行けるを知らず、たゞ市中の評判にうかれし故なり。

○新著月刊が掲けたるわれの談話に、總清は其頃繁昌云々とするは、筆記者の誤りなり。繁昌をいはゞ、寧今の方なるべし。河岸の折は什器も古代なるがかりしが、賣るといふに人々切にとゞめけれど肯かず、勝も枕も皿も鉢も、皆今出來の百人前なるに改めて、さて橋際の本陣の高樓に移りたるなり。

○凌雲閣の横手なる者賣屋が看板こそ、最をかしきものなれ。申す迄もなくペンキ塗にて、黒き羽織着たる客の前に、さしみ口取数々のものを載せたる膳を置き、婢ありてこれが酌に侍するの圖なり。されど流石に、鳥賊鍋、蛤鍋、河豚鍋の本性は忘れりけん、下足机をかきそへ、記して曰く、五百番。

○あまさがると枕詞いふ程ならねど、十三許なる小娘の部には相違なき處より來れるに、鳥か魚か、何なりとも馳走すべし、この上の無き好きを言へといへば、煮たる炙きたる皆望まず、たい鯉のといふに少しくあきれながら、其尾について鯉の何ぞと問へば、から鯉

○骨をもあまさずと稱する老人に、これはと鯉を出したるに、やはり剩さざりき。

○極めて辛きを好むと、極めて甘きを好むと、端なくも人の許にて落合ひたり。其家の内賣の索麵を供したるが、辛き方は生醬油なりしに、やがて箸をとめて、こは甘し今少しく生醬油をといへば、甘き方も素湯なりしに亦箸をとめて、こは辛し今少しく素湯をと言ひけり。

○日本橋より今川橋に到る間なり、或夜通行の際便所を索むれども得ず、街角なる賣卜者に就て、今差懸りたる身の上の大事とたづねれば、内々ながら誨へくれたるは後の溝板に、三寸四方ほどの穴を穿ちて、常々自らが用にて居たるものなり。げにこれは内々なるべし。

○横濱永樂町にたづぬる人あり、不知案内の事なり夜の事なれば、大江橋を渡りて煙葉賣居たる婆に問ひしに、あはゝとのみにて答へず、更

に四五間行きて、大道易者の前に小腰屈むれば、はや算木に手をかけしが、あゝ左様か吉原へおいでか。我れは永樂町といふは、同地の遊廓なりしに初めて取入りぬ。

○きそはの「そ」の字の可笑しくひねくれて、紙にてつくれる如様の如きこと、何れの家の看板も一樣なりしは、其折同地に於て際立て目につきしものなり、看板かきの少きゆゑにや。

○月あかき夜打連れて上野に入り、うか／＼と屏風坂を降りけるに、彼處なる車は他に往かず、きまり物の由突然馳來りて、七錢といはゞ聞えの高かるべしとや、且那參錢五厘宛と聲懸けたり。

○兩國橋のたもとに車をよびて、賃は言ふまゝに與らすべし、何處なりとも各々が好む處に曳行けといひしに、われを乗せたるは本所を一週して、復元のたもとに下しぬ。翔句を載せたるは燕直に、彼の門といふに曳込みぬ。今ひとりの三といへる男は、砂村十萬坪に持行かれて、こはいかにと言へど約束なれば下り給へと車夫はきかず、一番高き車代を取られて、寂しき冬の夜道をとぼ／＼と歸り來りぬ。

○四五歩曳出せば、車に乗りつけたる人かあらぬかは判るなり。小僧らしきは東葉婦人などの、抱若くは袴ののやうにかまへて、乗る時はわくるくごりたる賃錢を、下りる時はそと晋せぬやうに蒲團の上に置いて行く事なり、かゝる人はわざと呼留めて、こまかに錢をよみたる後、はじめて大聲に難有うといふなりと、或客待の車夫語れり。

○わが知合なる漢學者の、酒まゐりたりといさゝかの事なれども、酔うて途に羽織落したるを、通りかゝれる車夫の拾ひ上げて、貴方のと差出せば、いや俺ではない、俺は自家からちやんと着て來た。

○四書は勿論、史記左傳の小さき唐本に仕立てられて帙に入りたるが、待合の床の間に堆く積まれたり。人の之を見て譲受けんといひしに、先祖からのなればと元はそれ者なりける女將の諸はず、何だか知つて居るかといへば、自家ですから多分淨土だと思ひます、蟲がつくのでこゝへ出しては置きますが。

○今は名高き或語學者の、嘗てしば／＼茶屋より勘定を促せども、いつもお手紙にて埒明かず、あぐねて其儘になりしに仕済ましたりと又參られたり。二階に登りて、不圖新しき額あるに目をとむれば、思ひきや選りに選りて其最も長きお手紙。

○庭に田舎家を造りたりといふに往きて見れば、腰張の反古の中に「さ」と頭字を書きたるわが手紙も雜り居たり。剣がさんとおもへど及ばず、心に懸るのみにて三年を経たるが、偶々改築の事あり反古は一切取除けられしに、ほつと安堵したり。

○人の妾となれる女のもとへ、年下なりし男の今又わかきを得たりとて、心中もすべきまなり、されども命なくなるなり、よき智慧あらば貸したまへと戯れに言送りしに、女の直ちにこれに答へしは、撥取りし手に似ず至極の能文なり、寫し置きたれば左に掲ぐ。

御返事申上り、當節は智恵と申もしたんとなくいへども姉弟のよし少しばかり申上り一命に別條なき法は山中へ身をなげるか海中にて首をくゝるか但しは小やうじにてのどを突くことに差支ないと存いほんの少々智恵御かし不申いつそ差上申いなほ又入用の節は取りに御つかはし可被成ゆめでたくもし新體詩見本の一節は、われ實にこれより採れるなり。

○おんまへ様われに厭きて、いよく捨て給ふよのと、いきまき荒く女の間へるに、男の返

事亦よし。

文披見致し世界は雨降り風吹く是非なきものに依り乍序申入内郵便切手は貳銭かゝり客なき宵の汁粉の方同じくはうまかるべくいふやう

○日の字四つ書きて、ヒビカジツといふ人、今越後に在りぞ。むかし谷の字四つ書きて、ヤ、タニヤと呼べる人の、松平氏の家中にありしと一對なり。

○文化元年、御尋に付申上候とて、諸家より書きて差出したる姓名のおもしろきをこゝに抄記すれば、寺五分刑部左衛門、狩野鹿太左衛門、大恩有難左衛門、七里鎌倉左衛門、竹中傳左衛門、松節日出度左衛門、竹下太八左衛門、入文彌六左衛門等、いづれもまけず劣らずなり。牧野佐渡守内、四月朔日夏右衛門とあるは、ワタヌキと讀むのなりと、人言へり。

○一二三四五六も同じ時、百貫満足兵衛とにも、毛利甲斐守内とあり。長坂血鎧九郎、野呂山野狐六、穴山宮内兵衛、一石八斗兵衛、三分一所典膳、草刈鎌由兵衛、加賀自由之兵衛の如きも、亦多からぬものなり。

○すぐれて長きは有馬中務大輔内、太田亦三郎兵衛之助、鍋島阿波守内、郷野千石諸家彌太

郎、水野日向守内、大岡田村新助之進五郎左衛門、姓とも名とも分かず、殆んど一口に讀上げ難きほどなるは、奥平大膳太夫内、菅沼筑紫分、妊高山綾太郎彦刑部左衛門。

○二字なるは此頃多くあれど、其時珍らしと稱したるは、京極能登守内、今一。

(自明治三十四年四月至十二月)